



2011年8月1日
 編集・発行：(財)日本国際協力システム
 〒162-0067
 東京都新宿区富久町10番5号
 新宿EASTビル
 Tel: 03-5369-6960
 Fax: 03-5369-6961
 E-mail: jics@jics.or.jp
 http://www.jics.or.jp

援助をカタチに



ジックス・レポート

JICS Report

JICSの実施事業を、毎回、テーマを絞りこんで紹介する広報誌。年4回(1・4・7・10月)お届けします。



photo: 上から スマトラ沖大地震・インド洋津波災害の復興支援に尽力してきた担当者2名にインタビュー
 津波被害を受けた学校を再建(スリランカ)
 発電開始間近の太陽光発電システム(完工前) (スリランカ)

特集

インタビュー：
 災害復興の経験・ノウハウを活かし、
 災害対応能力の向上を目指す

2011年3月に発生した東日本大震災からの復興に向けて、日本中でさまざまな取組みが実施されています。海外においてもスマトラ沖大地震・インド洋津波災害(2004年12月)、パキスタン地震(2005年10月)、ジャワ島中部地震(2006年5月)、中国青海省地震(2010年4月)など、大きな災害が各地で発生しており、その都度、日本政府は各国に対する復興支援を行ってきました。

JICSはこれらの復興支援に関して、緊急に必要な物品の調達や、倒壊した学校・医療施設・道路・橋梁の復旧などを実施してきました。これまで、復興支援に関わってきた担当者2名が、「当時の現場の状況」とともに、業務を通して感じたことをお伝えします。

Topics

最初の評議員の選定委員会および2011年度第一回通常評議員会・理事会を開催

専務理事 退任あいさつ

国際的な調達機関を目指して

環境プログラム無償 スリランカ

太陽光発電システムが発電開始間近

災害復興の経験・ノウハウを活かし、災害対応能力の向上を目指す



津波の被害で一面に広がる、がれき(インドネシア・アチェ州)

東日本大震災をきっかけに、災害復興のあり方、特に災害対応能力の向上について社会の注目が集まっています。JICSがこれまでの災害復興支援活動を通して得た経験・ノウハウとは何か? そこにこれからの災害復興支援のヒントがあるのではないかと。スマトラ沖大地震・インド洋津波災害の復興支援に尽力してきた長谷川庄司、尾ヶ口和典の2名に話を聞きました。

プロフィール



業務第一部 次長
長谷川 庄司(はせがわ しょうじ)

1990年入団。スマトラ沖大地震・インド洋津波災害 ノン・プロジェクト無償(インドネシア)、ジャワ島中部地震災害緊急無償ならびに防災・災害復興支援無償、ペルー太平洋岸地震 防災・災害復興支援無償、バングラデシュ サイクロン「シドル」被災地域多目的サイクロンシェルター建設計画など、数多くの復興支援にプロジェクトマネージャーなどとして関わる。



業務第一部 施設第二課
尾ヶ口 和典(おがくち かずのり)

1999年入団。スワジランド、アンゴラ、シリアなど、アフリカおよび中近東諸国の食糧増産援助(現「貧困農民支援」)無償における調達業務、アフガニスタンに対する緊急無償などを経て、スマトラ沖大地震・インド洋津波災害 ノン・プロジェクト無償(スリランカ、インドネシア)、インドネシア ジャワ島中部地震災害緊急無償および防災・災害復興支援無償を担当。

Q1 JICSと災害復興支援の関わりについて教えてください。

きっかけになったのは、2004年12月26日に発生したスマトラ沖大地震・インド洋津波でした。年明けすぐの2005年1月5日には調査団を派遣しました。そして、調査の結果、インドネシアに146億円、スリランカに80億円、モルディブに20億円のノン・プロジェクト無償を実施することが決定、1月17日には日本国政府と被災国政府との間で交換公文(E/N)が締結されました。これは前例のないスピーディーな対応でした。

これだけスピーディーに援助が決定したのは、未曾有の大災害に対して一刻も早く支援を開始できるよう、日本政府が「ノン・プロジェクト無償」による援助を採用したことが大きな要因だと考えています。

またJICSとしては、それまでの実績から、外務省に信頼していただいていたからこそ、このような規模でのノン・プロジェクト無償の調達代理を担うことを任せられたのだと自負しています。

災害復興を目的としたノン・プロジェクト無償の前例はそれまでになかったため、不安もありましたが、JICSがそれほど大きい組織ではなく、風通しが良いといいますが、先例主義に陥っていないことも、少なからず良い方向に機能したと思います。

さらに、かつてアフガニスタン、イラクの戦後復興の際に行った緊急無償や施設建設型案件で得た経験が活かされたことも大きかったですね。

Q2 スマトラ沖大地震・インド洋津波災害復興支援において、JICSはどのような役割を果たしたのですか?

ご存じのように、スマトラ沖大地震の被害は尋常ではなく、緊急かつ柔軟な対応が求められました。また、災害発生から緊急支援、復旧、復興に至る一連のステップでは、ニーズは刻々と目まぐるしく変わります。当初は水、食糧、薬だったものが、テントや毛布になり、少し落ち着くと学校というように...

JICSの役割は先方政府の調達代理機関としてエージェンツ契約を結び、これらニーズの変化を確実に具体化し、入札など必要な手続きを行い、被災地が必要とする物資を迅速に用意する一方、コンサルタントや施工会社との直接の契約者として復旧・復興のための施設案件などのプロジェクトを推進することでした。案件の実施にあたっては、現地でのさまざまな判断をある程度、任せてもらえたため、現場の状況を踏まえた柔軟かつ迅速な対応が可能となりました。

復興支援ということで、資金をできるかぎり現地に還元できるよう、現地



トラックで運ばれたテントは被災者の住居や学校・病院用としても活用(インドネシア)



再建工事が完了したラトガマ警察署(スリランカ)



インドネシア ジャワ島中部地震災害復興支援で建設した小学校で学ぶ子どもたち

調達の徹底化を図りました。コンサルタントも施工会社も、そのほとんどを被災国の会社から調達するように工夫しました。また、できるだけ被災地の人々の雇用の創出につながるよう、インフラ修復案件などにおいては、総人員の一定割合以上の現地の人々を雇うことを入札条件に設定したりしました。実際にどの地域出身の人々が何人働いたか、毎日、記録をつけてもらうようなこともしましたね。

Q₃ 「防災・災害復興支援無償」創設の経緯を説明してください。

スマトラ沖大地震・インド洋津波災害を契機とした、世界的な防災対策への関心の高まりと、防災・災害復興分野で長年にわたって培ってきた日本のノウハウや経験、技術力を途上国の支援事業に活かしていくため、2006年度に「防災・災害復興支援無償」が創設されたと聞いています。そしてスマトラ沖大地震災害復興においてJICSが果たした役割が認められ、「防災・災害復興支援無償」の調達代理機関も担当させていただいています。JICSでは、この無償に関しても、役務や資機材に関わる調達業務と資金管理業務、そして案件全体の監理を相手国政府に代わり担当しています。

何よりもスピード感が求められる

防災・災害復興支援では、今後も、JICSの強みである柔軟性および機動性がいかに発揮できると信じています。

Q₄ 復興支援の経験から得られた教訓にはどんなものがありますか？

復興のためには、道路や学校、病院といったインフラ施設も支援対象になってきますが、施工案件が計画通りに進むかどうかは、施工会社によって大きく左右される、ということです。現地の施工会社が契約者の場合、無償資金協力による施設建設の経験が少なく、日本側が求めるレベルに達しないケースも想定されます。ですので、入札において極力、施工能力の高い企業を選定するために最適な入札条件を設定すること、および現場視察や工事関係者とのミーティングを通じて、常に適切な進捗・品質管理を図っていくことがJICSの重要な任務になっています。

それから、現地に権限を委譲してもらえばもらうほど、素早い対応が可能だ、ということですね。多くの関係者の合意が必要となると、どうしても時間がかかります。その間に被災地の状況は変化し、ニーズも変わってしまう、ということにもなりかねません。スマトラ沖大地震のときは、承認事項に関係機関が何事も即断・即決で

対応してくれたこと、そして先方の実施機関の長官が強力なリーダーシップを発揮してくれたことが、迅速な対応の実現につながったと思います。

Q₅ 災害対応能力を向上させるためには何が必要ですか？

インドネシアが良い例だと思うのですが、大津波直後、復旧・復興を担ったのはジャカルタのBAPPENAS(国家開発企画庁)でした。ところが、ジャカルタと被災地との連絡がうまくいかず、復興作業がなかなかはかどりませんでした。そこで復旧・復興案件だけを担当する機関として、BRR(アチェ・ニアス復興再建庁)が、復興現場でもあるアチェ州の州都バンダアチェに設立され、支援活動が一気に加速したのです。

このことは、復興支援において現地に権限を委譲するのがいかに大切か、を教えてくれていると思います。現地のことは現地に任せるのが一番早いのです。もちろん、現場はそれだけ責任も重くなり、ときに委ねられた責任を全うするための勇気も必要になってきます。JICSの経験やノウハウを無駄にしないためにも、この経験を、機会あるごとに提言し続けたいですね。

最初の評議員の選定委員会および2011年度第一回通常評議員会・理事会を開催

2011年5月25日、最初の評議員の選定委員会を開催しました。これは同年3月に開催された理事会・評議員会における、一般財団法人への移行方針の決定、およびその後の主務官庁による「最初の評議員の選任に関する理事の定め」に対する認可を受けて、実施されたものです。

当日は、評議員会の目黒依子会長をはじめとした5人の委員に対し、仲谷理事長より、まずは評議員および評議員会の有する権限、評議員の欠格事由などを説明し、その後、8人の候補者一人ひとりについて、候補者とした理由、JICSおよび役員との関係などを説明しました。審議の結果、候補者全員が最初の評議員として選任され、一般財団法人への移行の登記とともに新たに就任することとなります。

次いで6月15日には2011年度第一回通常評議員会、翌16日には同理事会を開催しました。評議員会では、(1)評議員会会長の選任、(2)2010年度事業報告、(3)2010年度決算および監査報告、(4)役員の選任、(5)定款の変更の案、(6)移行後の最初の評議員および役員など、ならびに代表理事および業務執行理事の氏名を「定款の変更の案」の附則に掲載する件、(7)公益目的支出計画の案、について審議が行われました。理事会では、上記(2)、(3)、(5)～(7)のほか、専務理事の辞任(下記「退任あいさつ」を参照)に伴う後任専務理事の選任について審議が行われました。

評議員会および理事会共に、特に(5)の議案については、主に目的や事業の条項についてさまざまな意見の表明がなされたため、本議案については改めて審議を行うことが確認されました。このほか、(5)を除く議案については、原案通りに評議員会で承認、理事会にて議決されました。これにより、8月1日付で江塚(前)事務局長が後任の専務理事に就任することになりました。



評議員会



理事会

退任あいさつ 坂本 隆



2010年7月31日より、専務理事を務めてまいりましたが、2011年7月31日をもって退任することとなりました。この間、関係者の皆様をはじめ、多くの方々にご支援とご協力を賜りましたことを、心から感謝申し上げます。

私は1976年に国際協力事業団(独立行政法人国際協力機構 JICA)の前身)に入団以来、主に技術協力プロジェクトや管理部門の業務に携わってまいりました。その後、JICSの専務理事に就任いたしましたが、共に同じ国際協力に携わる機関でありながらも、JICAとJICSでは、求められる役割も直面する困難や課題も大きく異なることを痛感いたしました。JICSの専務理事として過ごしたこの1年間は、援助をまた別の角度・視点から見ることができ、大変貴重な経験になったと同時に、JICSの役割を改めて認識する機会となりました。

JICSは設立より22年間、ODAのニーズの変化に伴う業務の変遷を重ねつつ、調達業務を軸とし、国際協力の現場において多くの経験を重ねてまいりました。一般財団法人への移行を控えた現在、仲谷理事長のもと、これまでの組織の在り方を振り返るとともに、新たな組織の在り方や目指すべき方向について検討が進行中ですが、今後も役職員が一丸となって努力と研鑽を重ね、JICSの目標である世界最高水準の「service provider」として飛躍していくことを祈念しております。

皆様方におかれましては、今後ともJICSへのご支援とご協力を賜りますよう、お願いいたしますとともに、皆様のご健勝をお祈り申し上げ、退任のごあいさつとさせていただきます。

国際的な調達機関を目指して

JICSでは、設立当初は主に日本が実施するODAのうち二国間援助に関わる業務を行っていましたが、国際調達に関する経験や知識を活用し、2006年度より、国際機関が行う多国間援助や、外国政府が実施する国際協力活動への参画にも積極的に取り組んでいます。今回は多国間援助について最近の事例と併せてご紹介します。

多国間援助(Multilateral Aid: 国際機関に対する出資・拠出)とは?

政府開発援助(ODA)の方式の一つ。日本政府が国連の開発援助機関や世界銀行などの国際開発金融機関に資金を拠出することで、開発途上国の開発に協力する援助の形態です。

国際機関を通じた多国間援助は、二国間の援助に比較して、国際機関の有する専門的知見や政治的中立性を活用できるとともに、二国間援助が届きにくい国・地域への援助や、国境をまたがる問題への対応が可能となる利点があります。

日本政府は、二国間援助と国際機関を通じた援助を効果的に組み合わせ、援助効果の向上を図ることを目指しています。2009年度のODA実績では、二国間援助が全体の約63.4%、多国間援助が約36.6%でした(支出純額ベース)。

事例1

WHO 西太平洋地域事務局(WPRO)による東日本大震災の報告書作成を支援

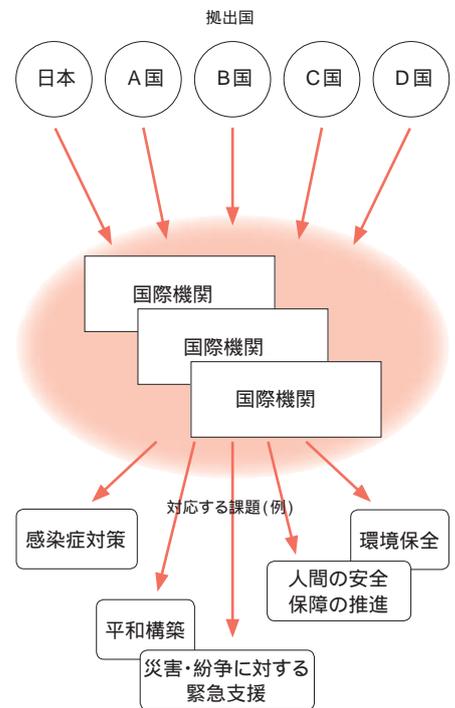
WPRO(WHO Western Pacific Regional Office)は、東日本大震災による人的被害をはじめとして、医療施設の運営状況、インフラの状態、原子力発電所の事故対応に関する情報、食品の出荷制限の有無、海水・土壌・空気の汚染状況など、幅広い情報を収集し「 Situation report 」としてとりまとめてウェブサイトで公表しています。WPROの要請を受け、JICSは、この報告書の作成に必要な各種情報の収集および英文化などの支援を行う要員を派遣しました。

事例2

韓国国際協力団(KOICA)を訪問

2011年6月23～24日、JICS職員がKOICA(Korea International Cooperation Agency)を訪問しました。KOICAは1991年4月に設立された、韓国のODA実施機関の一つです。今回は、日本の無償資金協力案件の実施における調達代理方式および調達代理機関の役割を説明するとともに、双方の組織と事業の概要に関する情報交換を行い、相互理解を深めました。

多国間援助のイメージ



それぞれ対応する課題や活動地域などに応じて、国際機関が設置されている



WPROで東日本大震災の関連情報を収集するチームメンバー(左端がJICS職員)



熱心にJICSのプレゼンテーションを聞くKOICA職員

環境プログラム無償 スリランカ

太陽光発電システムが発電開始間近

長く続いた内戦が終結したスリランカでは、今、観光・農業・工業などの分野の経済が活気づき、電力の需要が高まっています。そこでスリランカ政府は、2016年までに国内の電力の10%をクリーンエネルギーでまかなう計画を立て、積極的に風力発電や太陽光発電の導入に取り組んでいます。

日本政府はこのスリランカ政府の取組みを支援するため、スリランカ南部の都市ハンバントタにおいて環境プログラム無償「太陽光を活用したクリーンエネルギー導入計画」を実施

しています。

本プロジェクトに関してJICSは、スリランカ政府と調達代理契約を締結のうえ、実施機関であるスリランカ国再生可能エネルギー機構に代わり、737.1kWの太陽光発電システムの導入に必要な機材などの調達や、資金管理を含む案件全体の監理を行っています。

2009年12月と2010年4月に行われた現地調査の結果を踏まえ、同年7月に入札会を開催し、8月から順次、敷地の造成、機材の製造・輸送・据え付け、管理棟の建設を開始しま

した。主にコロンボ事務所を拠点に業務を行うJICSの現地コーディネーターも、月に2～3回ずつ、片道6時間かけてハンバントタに足を運び、現場での業務の進捗確認や、プロジェクト関係者間の調整に努めてきました。これまでに、およそ15,000㎡の敷地に約3,500枚の太陽光発電パネルの設置が完了しました。2011年8月中にすべてのシステムが完成し、スリランカ側に引き渡される予定です。なお、このシステムは、スリランカにおける再生可能エネルギーの教育施設としての活用も決まっています。



整然と並んだ太陽光発電パネル(完工前)



スラムの住民の経済的自立支援とエコバッグ普及プロジェクト

このコーナーでは、これまでにJICSが支援した団体より、事業実施状況について報告していただきます。

【(特活)アamani・ヤ・アフリカ】AMANI YA AFRICA

失業率が50%を優に超えるケニアでは、たとえ学歴があったとしても仕事に就くことは難しく、初等教育しか受けられなかった者には、就職のチャンスはほぼ、ない状況です。

当団体はJICSからの支援を受け、2010年8月末から2011年3月末までの約7カ月間、ケニアの首都ナイロビから北西に約40kmの町ティカで、十分な教育を受けられなかった若者や障がい者へ洋裁の職業訓練を行い、その過程で製作したエコバッグをスラムに住む人々へ無料配布して、環境問題の解決への第一歩としてもらうプロジェクトを実施しました。

洋裁経験のない4名の若者に足踏みミシンの使い方の基礎から指導し、シンプルなバッグから始めて、裏地やポケットを付けた

りと、技術的にステップアップしていく3種類のエコバッグを製作しました。

生徒たちには、手に職をつけて自立してもらいたいとの思いから、卒業時にプロジェクトで使用した足踏みミシンを無料で提供しました。

また、ケニアのスラム地区は至る所にビニール袋が散乱しており、住民が燃やして処理しています。健康問題や生活環境の改善を目指す第一歩として住民に説明を行い、ビニール袋の代わりにエコバッグを使用してもらうため、訓練で製作したエコバッグをすべて無料配布しました。訓練を終えた生徒には今後、当団体が独自でドレス製作などの指導も行い、プロジェクトを繰り返し実施していく予定です。



足踏みミシンを使った洋裁の訓練

(特活)アamani・ヤ・アフリカ

ケニアに住む人々の生活向上を願い、スラムの住民の自立に向けたフェアトレード活動や、スラム内の小学校の運営サポート、日本国内ではアフリカについて正しく伝えるための交流やイベントなどを開催している、1999年に設立されたNPO団体です。

<http://amani-ya.com/>

JICS NGO 支援事業：2009年度

対象国：ケニア

支援の内容：ケニアのスラムの住民に対する洋裁技術の訓練とエコバッグ普及プロジェクトに必要な足踏みミシン、布、作業机・椅子などの購入費やスタッフ人件費など、合計100万円を支援。

パキスタンとインド、クリケットで因縁の対決!

名木田 朋幸

JICAパキスタン事務所 出向中

2011年3月30日午後。多くのパキスタン人の熱い眼差しが、テレビモニターに注がれていました。視線の先には、インドのワンケード・スタジアムで、パキスタンのクリケット代表チームの選手たちが躍動する姿がありました。

2011年は、4年に一度行われるクリケット・ワールドカップの開催年にあたります。10回目の今大会は、栄冠を目指して全14チームが、2月中旬の予選ラウンドから長きにわたる戦いを繰り広げてきました。

クリケットは、英国と、かつてその支配が及んだ国々を中心に人気を博しているスポーツで、パキスタンでは国民的スポーツともいべき存在です。そのワールドカップで、3大会ぶりに準決勝まで駒を進め、準決勝の対戦相手は色々な意味でラ

イバル視されるインド。これで盛り上がるなどというのが無理な話です。

今回のインド戦にあたり、パキスタンのギラニ首相は観戦のためにインドを訪問。また、パキスタン政府は急遽、試合当日の午後を休日とすることを発表しました。パキスタンにとって、これが単なるスポーツの試合ではなかったことを物語ります。私が勤めている事務所の現地職員の多くも、試合当日は朝から「心ここにあらず」状態で、午後は休暇を取得して、そそくさと帰宅の途につきました。

さて、肝心の結果はというと、260対231でインドの勝利。インドは、決勝でもスリランカを敗り、7大会ぶり2度目の優勝を果たしました。一方、敗れたパキスタンでは、残念ながら試合の翌日が勝利を祝う休日になることもなく、何事もなかっ

たかのように、普段と同じ生活に戻りました……。

次回のワールドカップは2015年。開催地は、オーストラリアとニュージーランドです。果たして、どのようなドラマが生まれるのでしょうか？



クリケット・ワールドカップは、ICC(国際クリケット評議会)が主催

リレー エッセイ

「同じ無償スキームなのに、プロジェクトごとに入札図書の書式が違う!」

機材の調達をメインとする部署から、施設建設の管理をメインとする部署に異動してきた際、最も驚き、かつうらたえたのが、建設企業などを選定する入札で使われ、選定された企業との契約条件も含む重要書式である「入札図書」の内容が、プロジェクトごとに異なることでした。

JICSの担当する機材調達プロジェクトでは、長年のノウハウが結集された入札図書書式が使われており、担当者はそれを基に、相手国やプロジェクトごとの特徴に合わせて微調整をしながら業務を進めていきます。

ところが施設案件、特に私が担当しているコミュニティ開発支援無償のプロジェ

クトでは、原則として相手国で流通している書式を採用しています。これは、入札に参加する会社のほとんどが相手国企業であることから、現地関係者になじみのある書式を採用することで、入札をはじめその後数年に及ぶプロジェクトを円滑に進めるためです。

担当者は、プロジェクトごとに異なる書式と一から格闘することになりますが、現地のものをもそのまま採用すれば良いわけではなく、日本のODAの原則やスキームごとに設定された調達のガイドラインに反しないよう、注意を払いながら業務を進めていかなければなりません。

前線に立つ現地駐在者の苦勞もさることながら、本部で複数のプロジェクトを担当する国内担当者は、各国から送られて

くるさまざまな「ご当地図書」を相手に、毎回、緊張感を持ってチェックにあたっています。

そのうち、どんな図書を見ても驚かない「入札図書マスター」に、私はなる! かな?



「ご当地図書」を囲んで、ほかの国内担当者と打ち合わせを行う筆者(右端)

入札図書マスターへの道? 「ご当地図書」との格闘

高野 彰子

業務第一部 施設第三課

JICSの動き

プライバシーマークを取得

JICSは、2011年6月17日付でプライバシーマーク(Pマーク)を取得しました。プライバシーマークとは、1998年4月から運用が始まった「個人情報を適切に取り扱っている組織を一定の基準で認定し、プライバシーマークの使用を許諾する制度」ですが、JICSでは2009年度より、規程類の整備とその規程に沿った個人情報の取扱いの実施、職員に対する教育などに取り組んできました。

今後も組織全体として個人情報に対する適切な取扱いを続けていくとともに、職員に対して、個人情報保護に関する一層の意識の向上に取り組んでいきます。



城西大学付属川越高等学校にて仲谷理事長が講演

2011年6月9日、城西大学付属川越高等学校にて、仲谷理事長が全校生徒約850名を対象に講演を行いました。

講演では、世界の平和・安定の実現には世界各国や民族における価値観・倫理観の共有が重要であるものの教育格差がその妨げとなっていること、また、この教育格差が経済格差も生んでいることを説明しました。そして日本はこのような格差の解消や世界の平和・安定に向け、国際協力(ODA)を行っており、JICSはその現場で実施業務に携わっていることをお話ししました。

今回の講演が、生徒さんにとって「世界」や「国際協力」に少しでも興味を持つきっかけとなれば幸いです。



講演は、これまでの理事長自身の経験も踏まえた内容

2つのタスク活動で、今後のJICSの方向性や組織・事業の在り方を検討

JICSでは、2012年4月の一般財団法人への移行を目指し各種の準備を進めていますが、今後のJICSの方向性や組織・事業の在り方も併せて検討すべく「中期事業アクションプラン」および「組織体制検討」の2つのタスクを2011年4月に立ち上げ、活動を開始しました。

これまでもJICSは4度にわたり中期計画の策定を行ってまいりましたが、ODAをめぐる大きなうねりの中で外部・内部の環境の大きな変化が生じました。これら環境変化の機会をとらえて、事業タスクでは中期事業アクションプランの作成(2012~2014年)、新規事業開拓に関連した諸検討、業務の質の向上(標準化・チェック体制)などの課題について検討を行っています。

一方、組織体制などについては、これまでも事業量の増大・変化などに応じて見直しを実施してきました。現在の体制は2008年10月よりスタートし、3年近くが経過していますが、現体制への移行後のさらなる外部環境の変化や実際の業務を通して、種々の課題が認識されるようになりました。また、業務の実施にあたって各人の役割の一層の明確化、また、業務効率の一層の向上などの必要性が認識されており、これらの課題について検討すべく取り組んでいます。

世界の子どもの絵を東北地方太平洋沖地震の被災地へ

職員有志が、それぞれのつながりを通じてパキスタン・カメルーン・ニカラグアなどから子どもたちの絵とメッセージを収集し、東北地方太平洋沖地震の被災地に届ける活動を行っています。これまで、呼びかけに応じてさまざまな国から届いた絵やメッセージに、その国の国旗とメッセージの和訳を添えて、模造紙に貼り付けてきました。2011年6月27日、準備が整った絵とメッセージを、有志の一人が石巻赤十字病院(宮城県石巻市)に届けました。絵は同病院のギャラリーに展示されています。



日本に贈る絵を描くパキスタンの子どもたち

お知らせ

JICSはNGO活動を応援します!

平成23年度JICS NGO支援事業 支援対象事業を募集中

私たちJICSは、開発途上国への援助活動を行っている日本の中・小規模のNGOやネットワーク型NGOに活動資金を支援しており、現在、平成23年度の支援団体を募集しています。

募集期間:2011年6月27日(月)~8月19日(金)

このNGO支援事業では、プロジェクトを実施する際に必要な資機材の購入費/輸送費、プロジェクト運営費以外にも、団体運営費や組織運営を強化するために必要な団体基盤強化費を支援対象に含めています。詳細はJICSウェブサイトTOPページ 組織 社会活動 JICS NGO支援事業(<http://www.jics.or.jp/jigyoku/ngo/index.html>)をご覧ください。

* 編集後記 *

JICSでも、東日本大震災以降、節電を心がけています。照明器具から蛍光灯や電球をはずしたり、エアコンの使用を控えめにしたり、などなど...

今回の電力不足によって、これまでいかに多くの電気を使って暮らしていたのか、改めて気付かされました。今まではあまり意識せずに過ごしてきましたが、自分の周囲を見回すと、節電のためにできることは本当にいろいろあるのですね。

夏本番を目の前にした6月半ばごろ、JICSにレンタルの扇風機がやってきました。家庭用よりもかなり大ぶり、なんとなく頼もしさを感じさせるこの扇風機、オフィスの所々に配置され、あちこちの方向に風を送ってくれています。懐かしさを感じるとともに、なんとなくエアコンには感じられない親近感がわくのは私だけでしょうか...?